

路

羽文雄文学全集 第十四卷
路

丹羽文雄文学全集 第14卷

一 路

一九七六年三月八日 第一刷発行

著 者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二番一
電話 東京〇三三九四五二二二(大代表)・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

(文1)

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©丹羽文雄 一九七六年 Printed in Japan



目次

羽文雄文学全集
第十四卷
路

創作ノ1ト……………499

一路……………7

丹羽文雄文学全集 第14卷

一 路

装幀 辻村益郎
（写真・一九五一年）

一
路

庭下駄をつっかけると、加那子は吾をふんで空を見あげた。客間のあかりをうけて、庭の吾は鮮明な、人工的なみどりを敷きつめたようであった。足袋の白さがあざやかだった。ゆたかな髪が顔の白さをひきたてた。しばらく空をみあげていた。

「何をしているのか」

座敷から声がかかった。われにかえったように加那子は客間にもどった。にこにこ盃に銚子を傾ける。にこにこしているのは自分だけのことのようにであった。

「何が見えたのか」

「赤松が、ゆれてましたわ」

庭には何本かの赤松が、しなやかにのびていた。いずれも三、四十年の幹の太さであった。

「風があれば、ゆれるだろう」

次期政党内閣の幹事長と噂されている客であった。

「赤松も夜は眠るのではないかと思ってました」

「馬鹿だね、そんなことに興味をもって……」

子供じみた興味のもち方であることは、加那子も十分心得ている。静かにゆれている赤松をみあげて、安心をした。この目でたしかめないかぎりには、不安であった。

うしろに山をひかえているせいか、庭の赤松は野生に近かった。不揃いに植わっているが、はじめは植林であった。植林されたことを赤松はごまかすことができないらしく、四十年後にも人手が加えられた行儀のよさをみせていた。下枝はきれいに払われていた。いただきの方にわずかに葉を茂らせているが、それでよく二十五米もある赤松が生きていた。伸びざかりの少女のような幹であった。中には直径十二、三糎の幹もあった。ゆれるのは細い幹にかぎられた。わずかな風にも、ゆれた。ゆれるのをたのしんでいるようなゆれ方であった。ゆれながら、何かをためしているふうでもあった。ほかの幹がしずまっているとき、細い幹だけが調和をやぶり、ゆれるのをみると、加那子はそれがただの松という気がしなかった。妙に人間臭いのだった。赤松の下は、一面の吾であった。が、松だけでは吾は死んでしまう。赤松の影を補うために若い楓が無数に植えられていた。若い楓は一定の高さであり、赤松の幹の美しさを邪魔しなかった。ほかにも檜とか山桜がないわけではなかったが、庭の中心は赤松と楓に占められた。二人の

のようであった。眉は描いたことがなかった。眉にかみそりをあてたことがなかった。が、まつ毛の一本一本に神経をつかう。一本一本の伸びを促進させるように指先でしごいた。口紅もひかえめであった。ふくよかな耳朶みみづぼである。骨ばった感じがなく、大きくて、やわらかな耳であった。そして、その耳は隠花植物のような青白さをもっていた。加那子の顔の中では眼の動きに魅力があった。ゆたかで、すなおな髪が自慢であり、そのためウェーブをひと筋かふた筋ぐらいしかあてていなかった。腰が小さかった。胸のふくらみを感じさせなかった。いかにも和服の似合うからだつきである。和服のために永年虐待されてきた日本女性ニッポンの典型のようであった。丸帯が加那子のからだによく似合っていた。

「君は堅気の娘さんというが、そのからだつき、その着こなし、動作、すべてが板の間をふんだ経験のあるひとしと思えない」

東京の、ある財界人がそういった。からだ全体で動いているときが、魅力的であった。

「ここにつとめて三年になります。見よう、見まねで、こんなふうになってしまったのですわ」

煙波楼には、花柳界の女も出入した。

「影響をされるにしても、限度がある。君には十分その素地があったからだ」

「おかみさんにきいて下さい。素性をこまかしてはおりませんわ」

「うん、だから、いっそう信じられないのだよ。亡くなったお父さんは、教育界で相当の人物だったときいている」

「そんなふうに思われますもの、不肖の子のせいでしょうね」

「しかし、何かやったらう。踊りとか、三味線とか……?」

「十五、六のとき、仕舞をすこしやりました」

加那子は姿勢がよかった。生れつき姿勢がよいというのは、ありえないかも知れない。加那子の姿勢のよさには、どこか不自然なところがあった。歩く場合上体をすえるようにするが、自然のままならすこしは崩れてもよかった。いそぐ場合、無理に上体をすえるので、からだのパラソスを何かで補わなければならなかった。両手を必要以上に前後にふることは、仕舞の情性で抑えられているので、手首から先をむやみと振った。ペンギンが羽根で調子をとっていきぐのに似た。酔った場合は、ことにそうだった。自分ではそのことに気がついていなかった。酔い心地の加那子の歩行をみていると、笑い出したくなってしまふ。

「花柳界の連中は君がそばにいと、けむったがるだらう」

「役目柄、敬遠されているようですわ」

そんな座敷には、つとめて永居しないように心がけてい

た。

「妓たちは君に庄倒されるからだ」

酒がはいると加那子は、全身から妖しい雰囲気をただよわせた。眸をすえた。加那子は何でもないときにも、必要以上に相手の眸をみつめる癖があった。誤解をあたえるような眼差であった。加那子としてはすなおに眸をあわせているつもりだろうが、その時間のながさと角度が限界をこえた。酔うと、その感じが濃厚となった。仕舞できたえられた行儀のよさが崩れて、妖艶と形容するほかにいいようがなかった。それは技巧ではなかった。演技される妖艶は、妖艶の型にはめられたものである。演技することは、さほど困難でないかも知れない。加那子のは生地から来ていた。肉体を感じさせないでいて、しかも妖艶であった。男女の機微に精通したいろけだろうが、あいにく加那子にはそれほどの経験がなかった。妖艶であるのは、偶然のようであった。妓たちは敏感にそれを感じた。妓たちは生地と演技のちがいを知っていた。妓たちは、加那子に女らしさを感じた。加那子は別の意味で妓たちに人気があった。「花柳界で君を発見しなかったのは、残念だ。いかにも芸者らしい芸者になれたらう。惜しいことだよ。動きの中に魅力がある。からだ全体がそういう雰囲気をもっている。その君がまったくの堅気とは、神さまも皮肉だよ。君は、お世辞にも肉感的とはいえないからね。潑刺とした感覺的

な魅力は、どこにもない。君はしらふのときにも、何となく嫵々としていた。昔、京の島原で、君のような感じの女をみたことがある。そういう女は時代とともになくなつた。女が洋装するようになっては、存在が出来ないからね」

「前世紀の遺物ですわ」

「老人は君をみると、郷愁を感じるだろう」

「よくよく現代的ではないのですわ」

加那子は肉体的に自信がなかった。女中たちといっしょに風呂にはいらぬことにしている。少女のころに鏡に映した自分と、現在の自分がそれほどちがわなかった。自分の肌に関心がうすかった。とりわけ肌が白いというのでもなかった。肌理がこまかくて、ぬめのようだが、それも少女の領域だった。指のつけ根にえくぼが出来たことがなかった。娘のころから、えくぼのできるところに皺をもらい上げていた。肉もうすかった。ひと前に差出せる手ではなかった。爪の形も平凡であった。

化粧が終ったころ、庭の赤松には気のないような残照があった。加那子は夜のきものをきた。煙波楼のおしきせである。女中たちとおなじものだが、無地のうぐいす茶に、帯もおなじ系統の薄いものであった。生地は上物である。加那子がとなりの女中部屋をのぞくと、ほとんどが支度を終り、番のものはすでに玄関へ向出していた。加那子は、

おかみの部屋におもむいた。

「あんたの歯がうらやましいよ」

おかみはそれを最初のことばにした。頬をおさえて、坐っているのも大儀なようであった。午後おかみが齒科医に出かけたのを加那子は知っていた。

「今日は治療がひどくながびてね」

加那子はべつに同情もしめさなかった。

「それにあの椅子が窮屈だろう」

齒科医の椅子がせまいのではなく、おかみの二十四貫が邪魔になった。加那子は白い歯並をちらりとみせた。義歯ではないかと疑われるくらいであった。おかみはぶよぶよと、だらしなく肥っていた。栄養過度も度外れがしている。立ち上るとき、両手をつかなければならなかった。動作が緩慢で、不自由であり、いつからか座敷に顔を出すことをやめた。どたりと玄関に坐っていた。坐ったままで客を迎え、送り出した。口と手だけは達者だった。おかみをみていると、いまにも肉体の一部から崩れていくような不安を感じさせた。人間の形体を維持しているのが、加那子には不思議だった。口の達者なのは、動作の不自由を相殺するためかも知れない。

「昔の丹阿弥には、煙波楼以上の料亭はなかった。私は何人かの総理大臣の顔をみているよ。本願寺の門主とも、親しくしてもらった。外国の大使という変わり種もあった。歴

代の大臣は、煙波楼の門をくぐらなければ一人前ではなかったものだよ。特権階級のひとばかりを相手にした」

「いまだって、そうでしょ。お寺関係の方、新聞社の重役、市のおえら方、財界、政界の名士ばかりですわ。新聞に名前が出るような方で、うちにいらいっしやらない方はほとんどないといっいでしょ。大学の総長とか、知事さんとか、肩書のある方ばかりですわ」

「それでも昔は、もっと高位高官の名士ばかりだった」

「お客さんの層が時代とともにひろくなったのですわ」

「変らないものが、ひとつある」

「何でしょうか」

「いくら高位高官でも、名士でも、男は男だということだよ」

加那子はわかったような顔をした。

「東京から丹阿弥入りをする、どのような立派なひとでも、唯一のたのしみは、若くて、きれいな女とあそぶことだからね」

そんな方面から観察しているおかみには、ときには客を客とも思わぬところがあった。ひと皮むけば、だれもおなじだというのだろうか。昔の風習は、現在もなおつづいていた。煙波楼からお茶屋や置屋に連絡をし、それぞれひと目につかない旅館に送りどけるとしてしていた。加那子は社会的にどのような地位を占める客に対しても、その

ため尊敬したり、おそれたりはしなかった。親鸞の血をひくという連枝を迎えても、ひとりの男性を感じるだけで、格別の気持もおぼえなかった。女中たちが特別の扱いをするのを見ると、おかしかった。女中たちは尊敬とまねをすることをまねているのかも知れなかった。心もときにはまねをすることがあるらしい。が、自分には女中たちと共通のものがないと思うと、一種の精神的不具ではないかとおのれを疑った。そういえば、もの心がついてから、尊敬という感情をしみじみと味ったことがなかった。生れつきの高慢不遜というのだろうか。生れつきにそんな性格があるわけはないとすれば、後天的のものだろうか。しかし、加那子は中学校の校長をつとめた家庭で育ち、とくに傲慢にならざるをえないような環境事情はなかったはずである。それは、傲慢とはちがうものかも知れなかった。

「うちはとくにお寺関係のお客さんが多いようですね」
「本願寺さんや高田さんは、本山経営のためにいろんな方をご招待なさるんだよ。末寺の重要なひととか、市の関係者とか、新聞社のひとたちを招待なさる。煙波楼としては、本山は大切なお得意さまだからね」

「私たちも本山のえらいお坊さんを大切にしてますわ」
「そろそろ時間だね。支度をして、玄関口にお出ましとしようか」

両手をついて、かけ声をかけて立ち上ったおかみはよろ

めいた。大きく八の字に歩いた。重いものを抱えて歩くようであった。そのうしろの腰幅は、人間のものとは思われなかった。横綱が泊ったことがある。そのうしろすがたに、加那子は気が遠くなった。自分が人間であることが押しつぶされそうだった。横綱の細君が自分とおなじ小柄なただの女であることを知ると、いよいよ途方にくれた。途方にくれるというほかはないおかみのよたよた歩きをみていると、加那子はたまらなくなる。おかみと自分がおなじ女であることが、皮肉な気がする。贅肉ばかりで、本来のおかみはどこかへいってしまったようである。贅肉をひきずっている女である。生きていくことは、この贅肉を腐蝕させずに、血をかよわせていくことであつた。便所通いの不便を気の毒がるよりも、加那子は恐怖をおぼえた。おなじ女がここまで化けられるということである。加那子はおかみの遠縁にあたる。おかみの血と関係がないわけではなかった。

二

大学出の帳場と番頭のひとりが自分に好意をよせているのを、加那子は三年前から知っていた。何かと便利なので、利用した。利用されて満足している男たちに、ありがたがることもなかった。客のきげんをとり、いくら主人にどなられても、ひとことのいい返しもしない男たちであつ